

# イチジクのエスレル処理による計画的な収穫

～計画的なローテーション収穫で6棟のハウスイチジクを作りこなす～

浅井信吾（東三河農林水産事務所田原農業改良普及課）

【平成30年7月18日掲載】

## 【要約】

イチジク経営において、労力の大半を占める作業は収穫と出荷調整である。JA愛知みなみでは「バラ受け共選」の体制が整備され、生産者は、選果とパック詰め作業が不要となり、その余剰時間を栽培管理に向け、生産規模を拡大してきた。さらに、収穫作業を効率化する方法として、管内のある生産者は、複数の加温ハウスを7つに区分し計画的にエテホンの散布処理（以下、「エスレル処理」という。）をすることで、熟期をコントロールして収穫作業を集約している。

## 1 はじめに

イチジク経営において、労働時間の大半を占める作業は収穫と出荷調整である。JA愛知みなみいちじく研究会のA氏は、共同の選果場でJAが選果やパック詰め作業を行う、「バラ受け共選※」体制により出荷調整作業を省力化し、さらに収穫においても、ハウスごとにエスレル処理をすることで、計画的な収穫作業を実践している。A氏の取組事例を紹介する。

※参考：ネット農業あいち 技術と経営 『「バラ受け共選」によるイチジク産地の強化対策』

[http://www.pref.aichi.jp/nogyo-keiei/nogyo-aichi/gijutu\\_keiei/kaju1411.pdf](http://www.pref.aichi.jp/nogyo-keiei/nogyo-aichi/gijutu_keiei/kaju1411.pdf)

## 2 生産状況の概要と特徴

A氏は、本人と家族2人と常時雇用1人で、6棟62aの加温ハウス、8aの無加温ハウス、19aの露地ほ場でイチジクを生産している。加温ハウス栽培は3月下旬から9月まで、露地栽培は8月から10月まで出荷している。ハウス栽培の収穫ピークは5～7月であり、午前5時から収穫を開始し、集荷時間の午前9時30分までに1日平均230kgを出荷している。

また、結果枝密度を平均の2割程度低くし、収量が少なくても品質の良い果実を確実に収穫することにより、収益を確保している。一般的な家族経営では、62aの加温ハウスの収穫・出荷は労働力不足で不可能であるが、A氏は、「バラ受け共選」と低い結果枝密度、そして計画的なエスレル処理による熟期のコントロールにより、大面積化と高品質・高収益を実現している。

## 3 エスレル処理と収穫の方法

### (1) エスレル処理のメリット

イチジクは、他の果樹に比べて収穫期間が長く、加温ハウス栽培では収穫期間が5か月に渡る。全園地を毎日見回って適熟の果実を収穫するため、大面積の場合やいくつものハウスを所有する場合は、労力が多大にかかる。

一方、イチジクの果実にエスレル処理すると、熟期が促進されることで、収穫期が揃うため、計画的に収穫できるようになる。JA愛知みなみいちじく研究会では2名の生

産者が畝ごとなど部分的にエスレル処理を活用しているが、A氏は園地を区分けして大規模で計画的に実施している。

(2) エスレル処理の方法

A氏は、当日の収穫が完了した園地で、その日の午後、気温が下がってからエスレル処理をする。処理方法は、単頭直射ノズルを取り付けたハンドスプレーで、エテホン100ppm（「エスレル10」、1000倍、果実成長第2期～終期/1果当たり1回）を、果実のどこか一部分に吹き付ける（写真1）。処理する果実の目安は、果皮の緑色が薄くなりやや黄色みを帯び、再肥大し始める頃とし、1結果枝2個までを厳守している（写真2）。処理適期より早い処理では、未熟のまま果皮が着色してしまうため、十分注意が必要である。



写真1 ハンドスプレーを用いたエスレル処理

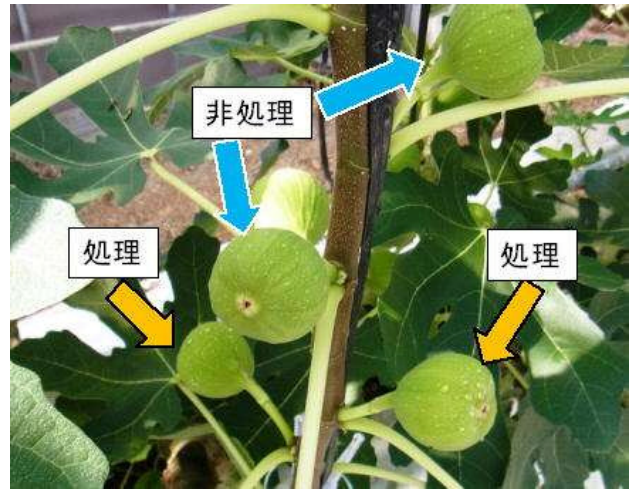


写真2 エスレル処理をした果実

(2) 収穫

エスレル処理後6～7日で収穫できるようになる。成熟が早い果実は処理6日目で収穫し、成熟が遅い果実でも7日目には収穫を完了する。そして、収穫を完了した日の夕方にはエスレル処理をする。このような作業周期を7区分した園地でローテーションで行い、合計62aのハウスでも計画的に出荷している（図1）。

図1 ローテーション収穫のイメージ

	1日	2日	3日	4日	5日	6日	7日	8日	
A棟	収穫	処理	→				収穫	処理	
B棟左側	収穫		処理	→				収穫	
B棟右側	→	収穫		処理	→				
C棟	→		収穫		処理	→			
D棟	→			収穫		処理	→		
E棟	→				収穫		処理	→	
F棟	→					収穫		処理	→

#### 4 ローテーション収穫の留意点

この収穫方法の実施には、作業性を重視した園地と樹体づくりが最も重要である。畝間を通常より広い2.5mとし、結果枝配置幅50cmを厳守して誘引している。これにより、処理や収穫の見落としが少なく、効率良く作業できるため、6棟のハウスであっても少人数で管理できる。また、太陽光が下段までよく入るため色づきが良くなり、秀品率も向上する。

A氏の加温ハウスは、栽植密度が低いため、10a当たり収量は約3tと県内のトップ生産者に比べて少ない。しかし、廃棄率が1%、秀品率が70~90%（部会平均52.3%）と正品率、秀品率は高いため、キロ単価は130円高くなっている。このように、収量よりも作業性と収益性を優先した園地づくりにより収益を確保している。



写真3 エスレル処理翌日の果実（左）と収穫前日の果実（右）